

ボランティア・市民活動のコーディネーター・応援者のための

ボランティア 情報

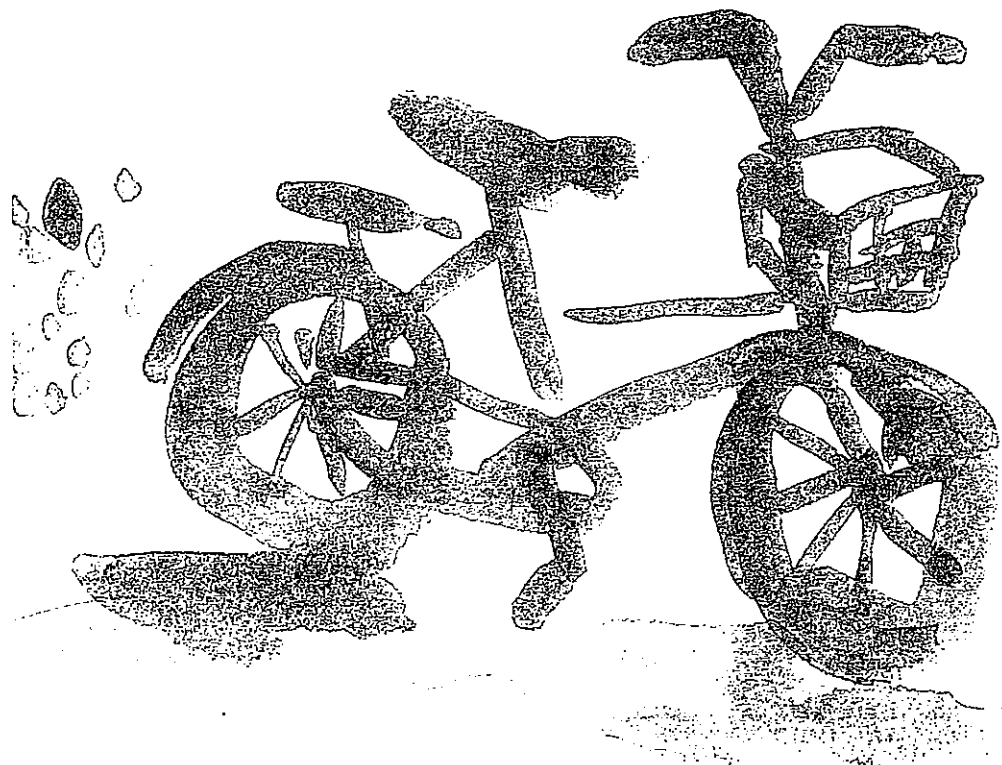
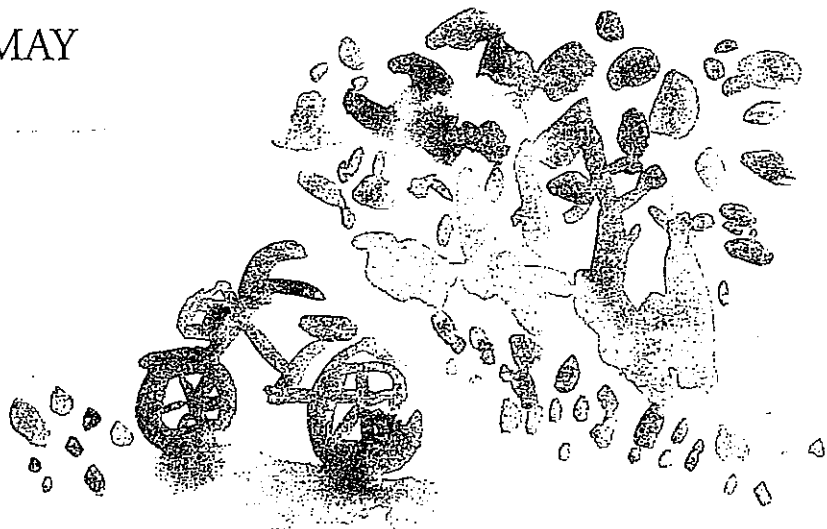
5

No.324

2004. MAY

**これからの
ボランティア・
市民活動センター像
を考える**

～「第2次ボランティア・市民活動
推進5ヵ年プラン」進行中…… 4



情報トピックス …………… 2

ボランティア・市民活動センターレポート
列島縦断…………… 3
島根県・羽須美村社協

第13回
**全国ボランティアフェスティバル
びわこのご案内**…………… 3

情報玉手箱 なるほど基礎知識…………… 7
今改めて「献血」を考える

ボランティアコーディネータースキルアップシリーズ⑥
**ボランティアに対する
個別活動支援ワークブック**…………… 7

ボランティア活動保険の広場… 8

POPPINS 編集委員だより…………… 8

事務局だより…………… 8

情報
玉手箱

基礎知識

今改めて「献血」を考える

献血運動は、「血液を必要とする人のために健康な人が自らすすんで自分の血液を提供することで、人の命を救うことができる大切なボランティア活動」です。一定の条件が合えば誰でも参加できる身近なものです。現在も、献血から輸血へという作業の中で何度も不安を招く事態が報道されるなど、ますます高い安全性が求められています。このような背景にあって、その重要性を今改めて考えるために「献血」を取り上げてみました。

昭和27年、「日本赤十字社血液銀行東京業務所」が開設されましたが、当時は民間商業血液銀行の買(売)血方式が主流で、輸血による肝炎の続発や頻回献血者の健康悪化などにより、政府は倫理面と安全性の確保の面から血液事業の正常化を図り、献血100%の体制が確立したのは昭和49年でした。

その後もエイズウイルスやC型肝炎などの輸血による感染の問題がおこり、安全確保に向けて2002年(平成14年)7月、血液製剤の安定供給をめざす「国内需給の確保」を基本理念とした「安全な血液製剤の安定供給の確保等に関する法律」が成立しました。日本赤十字社中央血液センター(日本赤十字社血液銀行東京業務所)の開設から50周年を迎え、ここで血液事業が法的根拠に基づいた事業となったのです。

◆献血は十分足りているのでしょうか？

現在、全国で年間約580万人(延べ人数)の協力により、輸血用血液はすべて国内でまかなわれ医療を支えています。しかし血漿分画製剤についてはまだまだ輸入に頼っているのが現状です。また、献血者の季節的な変動により一時的に不足することもあります。血液は人間の体の中でしかつくれず、長い期間保存するこ

ともできないので、輸血に必要な血液をいつでも十分に確保しておくために絶えず献血が必要になるのです。

◆献血できる年齢は何才ですか？

献血ができるのは16才～69才の人です。ただし64才以上の方は60才以後に献血経験のある人に限り献血ができることになっています。

◆検査で病気がわかりますか？

希望により通知するものもありますが、基本的に検査目的の献血はあってはならないことです。近年エイズ検査目的の献血が増えてきていることですが、エイズ検査の結果は通知されてはいません。また各種ウイルスには検出不可能な時期があることから、ウイルスに感染した血液が検査をすり抜け、多くの悲劇をもたらしたことはまだ記憶に新しいことです。

◆献血以外にもお手伝いできることがありますか？

日本赤十字社の血液センターではイベントの実施や献血会場での呼びかけ、受付などの手伝いをするボランティアを募集しています。詳しくは各地域の血液センターに問い合わせてみましょう。

日本赤十字社では、全国を7ブロックに分け献血の調整体制を構築しており、血液センターは全国に76か所あります。

日本赤十字社 事業局 血液事業部
〒105-8521 東京都港区芝大門一丁目1-3
TEL 03-3438-1311 URL <http://www.jrc.or.jp>

ボランティアコーディネータースキルアップシリーズ⑥ ボランティアに対する個別活動支援ワークブック

ボランティアコーディネーター研修プログラム教材開発研究委員会(委員長 上野谷加代子) 編

規格：B5判/104頁 定価：735円(消費税等込) 発行：全国社会福祉協議会・出版部 (TEL 03-3581-9511)

スキルアップシリーズ6冊目は、一人ひとりのボランティアに対し、ボランティアコーディネーターがどのように活動支援をしていくか、その体系的な方法を示すことを目的としています。個々のボランティアが活動を決め、スタートさせ、軌道に載せ、うまく継続していく、または活動の建設的な終了や転換・移行ができるように支援していく、というボランティア活動の開始から終了までの一連のプロセスを支援していくための枠組み・技術を学びます。



CONTENTS	
事 例	学 習 の 視 点
1 活動を決めるプロセスへの支援	単に活動希望に合わせて活動紹介を行うのではなく、もう一歩進めて、活動希望者のボランティア活動への動機や欲求を考え、理解することで、よりその人にふさわしい活動を紹介することを学習する。
2 ボランティアの募集から活動に入るまで	ボランティアを募集し、実際の活動に導入するためのコーディネーター業務を学ぶ。事例をもとに、留意点や効果的な進め方について検討する。
3 活動上のリスクとその回避	ボランティアの活動環境を整えるために、活動が始まる前にリスクの予測を行い、できるだけリスクを回避して、活動が継続できるようにするための支援方法を考える。
4 活動のフォローアップ	活動の効果や問題点の評価、ボランティアからの支援を求めるサイン、という二つの視点から、ボランティアへの支援方法を検討する。
5 アドボカシー	アドボカシーとは、弱い立場にある人や抑圧された状況にある人をサポートし、健全な社会関係の構築や社会活動を支援する活動のこと。アドボカシーという面から、Vコーディネーターの活動について理解を深める。
6 活動の転換と建設的終了の支援	継続してボランティアが関わっている活動の場合に、その活動が中止になったり終了したりする要因を分析し、活動の転換あるいは終了時における、ボランティアに対するVコーディネーターの関わり方を検討する。
7 応用問題	ワークブックの総仕上げとして、困難ケースに関わるボランティアへの支援のあり方を事例研究することによって、個別活動支援の方法について考える。